

戴、御膳小戴と変わっていき、名称、注文数の変化から、奥御所の女官、典侍たちの心理の動きを読み取ることもできる。

その他の菓子類の出現は二期に分かれる。初期の延享―安永年間には草餅、あん餅など材料がそのまま分かる名称であるが、文政年間以後は野山餅、白糸などそれまでにない趣のある名称が現れ、現在の和菓子の形に近づいている。

このように菓子の注文によって、宮廷の各種の行事の実態をうかがうことができ、注文数は天皇の方針、政治的、文化的情勢によって変わっているが、幕末の数十年の間には物価上昇の影響が強く現れている。

同志社校地出土の埋蔵文化財⑮

鈴木 重治

『乾山・道八・永楽銘陶片』



(江戸時代)
同志社中学校体育館地点他出土
乾山銘の高台径 4.1 cm

同志社キャンパスから出土している近世の陶磁器のうち、在銘の資料はきわめて少ない。

ここに示す乾山・道八・永楽銘の陶片は、公家屋敷や武家屋敷で使用した懐石用の食器と、それに関係する資料の中でも基準となる一群である。

乾山(一六六三―一七四三)は、兄光琳

とともに近世美術史上に一頁を残しているが、情趣的で沈静な作品が評価されている。仁清と親交し、元禄十二年(一六九九)彼から土、釉、絵付などを記した陶法書を伝受した。一方、楽家四代(一入)とも懇意で、彼からは楽焼を学んでいる。京都銀座年寄中村内蔵助などの理解者を得て作陶に従事し、とりわけ書は乾山のもっとも得意とするところと定評がある。また

「乾山焼」の特徴として、絵替り金彩の土器皿、錆絵付に白を配したものがよく知られている。乾山は、楽焼の釉の下に赤・緑・黄・紺青・紫などの顔料で絵付することを初めて試みており、それに成功している点でも重視してよい。

道八は、初代が高橋道八で、二代が仁阿弥道八(一七八三―一八五五)である。木米とともに颯川(さしかわ)の門に入り、京焼伝統の純日本風の作品をめざし、木米の中国的感覚と対比される。

永楽保全(一七九五―一八五四)は、当時の煎茶趣味に乗じて、交趾写し、祥瑞写し、金欄手などを工夫し、明るい華麗な色調に特徴のある作品を残している。

(大学校地学術調査委員会調査主任)